

保 育

感じ、イメージし、あらわす喜びを育む

—自然に対する感動や不思議さを体感しながら—

池 田 明 子

1. はじめに

一般的に現代の子どもたちは自然にふれる機会が減り、自然に対する感動体験が少なくなっているが、実際の子どもたちを見ていると、果たしてそれが全てだろうかと思いをかきながら首をかしげたいくなる思いにかられることがある。子どもたちは日々ささやかな自然にふれる中で様々に心動かされ、瞳を輝かせながらかかわっている姿をよく見るからである。むしろ、自然に感動したり不思議さを体感したりする子どもの経験をより豊かに育てていく私たち大人の姿勢が問われているのではないかと思うことがある。

そして、幼児期にこそ感動したり不思議に思っただかかわってみたい、時には神秘さを体感したりすることが、将来自分たちの生活を創造的に切り拓いて生きていけるのではないかととらえている。

このようなことから、自然に対する感動や不思議さを体感することができる素地として、日々の生活の中で感じ、イメージし、あらわす喜びを積み重ねていく営みが必要であるととらえてテーマを設定し、研究を進めることにした。

2. 研究の構想

(1) めざす子どもの姿

4歳児の子どもたちは、自我がぐんぐん伸びていく時期であり、“面白そう”と思ったことは“やってみよう”と自分なりにかかわってみたいとする意欲が高まる時期である。“やってみよう”という意欲を支えるものは、やはり“すごいな”と感じたり、“～なのかなあ?”とイメージしたりす

ることである。身近な自然に出会った時の感じ方やイメージは子どもによって様々である。特に4歳児はイメージが豊かに広がる時期でもある。そのような時期にこそ、子どもたち一人ひとりの多様な感じ方やイメージやあらわし方を認めることが、自分なりに積極的にかかわる意欲を高めることにつながっていくのではないかと考える。したがって、今回の研究において、めざす子どもの姿を次のように設定して研究をすすめることにした。

自分なりに感じ、イメージし、あらわして遊ぶことを楽しむ子ども

(2) 具体的方策

めざす子どもの姿に向けて、次のような具体的な方策を考えて、研究を進めていく。

- ・身近な自然に対して様々な感覚を通して感動したり、イメージを広げたりする環境構成や教師のかかわり
- ・自分なりに感動したりイメージしたりしたことを自信をもってあらわすことができるような環境構成や教師のかかわり
- ・友だちの多様な感じ方やイメージにふれることのできる環境構成や教師のかかわり

3. 実践事例

実践例1 「身近にあるものを植えてみよう」

(5月～7月)

「種を植えてみよう」

保育室の前に、昨年の年中児が植えた柿の種が芽を出し、小さな葉っぱをつけている。「これは何だと思う？」とそばにいた子どもたちに尋ねて

みる。すると、「これはどんどん大きくなると大きな木になるんよ」「わからん」「“め”よ。何の芽かわからんけどね」「すいか」「きっぽんかっぽん」「たんぽぽ」「いちご」など様々な答えが返ってくる。

そのような話をしているとちょうどA女が家で拾った梅の実を持って来る。「これは何だと思う？」と尋ねると、「そらまめみたい」「りんごみたい」「みかんみたい」「とりのあたまみたい」「マンゴーの形してる。けどね、におったらやっぱり梅のにおいがする」と数人の子どもたちがそれぞれにしゃべっている。A女は「これはね、梅の実なんだよ。梅の種を植えたらね、梅ができるんよ」と話している。

この絶妙なタイミングを生かしたいと願い、みんなの前でまず改めて実は昨年の年中組の子どもたちが柿の種を植えたものの芽が出たことを話す。そして、A女の言葉を紹介して小さな植木鉢に梅の種を植えて保育室前に置くことにする。

このことをきっかけにしながら、誕生会の会食の際に出たサクランボの種や、お弁当のご飯粒・枝豆・トウモロコシなど、家にあったビワの種、園庭で見つけたタンポポやガーベラの種、カラスノエンドウで豆笛を作る際にさやの中に入っていた豆などを植えたいという声が聞こえ始める。子どもたちが植えたいと言った時に一緒に植えることを積み重ねていく。

例えば弁当に入っているご飯粒や枝豆のように明らかに発芽しないものもあるが、何より子どもたちが身近に見たもので“種”として何気なくとらえたものを“植えてみたい”と感じていることを大切にしたいと願い、子どもたちの多様な思いを受け入れるようにする。

「芽が出てきてるよ」

子どもたちは、気がついた時には水やりを始め様々なことに気づく姿が見られる。

- ・ 昨年の年中児が植えた柿の芽を見て「柿の赤ちゃんにもあげよう。のどがかわいてるかしら

れない」とつぶやきながら水やりをしている姿。

- ・ 「ねえねえ、見て見て！私が植えたタンポポの種がこんなに（芽が）出てるよ」とそばにいる友だちに声をかけている姿。「ほんまじゃあ」と言いながら持っていたじょうろで「大きくなあれ」と言いながら、自分が植えたものや友だちのものまで水やりをしている姿。
- ・ 「ほら見て！私とお友だちが植えた豆笛の芽も出たよ！」と教師に伝える姿。

芽が出るといっても実際は植えた種ではなく雑草の芽が伸びてきているものがほとんどなのだが、それでも子どもたちにしてみれば、“芽が出た”ことそのものが嬉しくてたまらない様子なので、そっと見守っておくことにする。

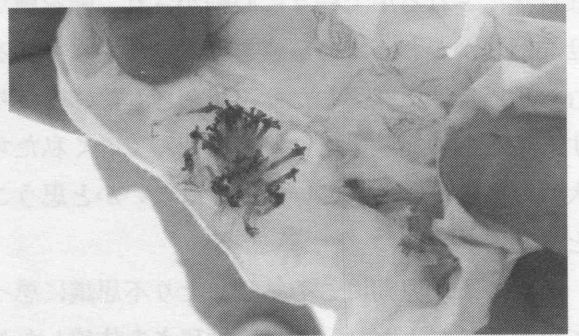


図1 外に咲いてたガーベラの種だよ

「芽が出てこないよ」

芽を植えることそのものが楽しいだけで、植えた後まで興味が続かない子も多いが、中にはなかなか発芽しないことに気がつき、「芽が出てこん」とつぶやく姿も見られる。

- ・ 「あっ、水をやるのを忘れてた」と急いで水やりをしている姿。
- ・ 「太陽の光が当たってないからかなあ？」と種を植えた容器を置く場所をかえてみる姿。
- ・ 「おばあちゃんに聞いたらね、サクランボの種はすぐに植えん方がいいんよ。乾かしてから植えたらいいんよ。冷蔵庫に一日入れて、それから植えたらびっくりして早く出るんよ」と植え方について祖母に聞いてくる姿。
- ・ 「植える季節に植えたら芽が出るんよ。すぐに

植えたら出んものもあるかもしれん。おじいちゃん畑とか花とかいっぱい植えてるからよく知ってるよ」と植える時期について祖父から聞いてくる姿。

植え方や植える時期について祖父母に自分で聞いてくる姿はとても貴重だと感じ、そのことをクラス全員の前で紹介するが、やはりこの時期の子どもたちは、見通しをもって考えたりイメージしたりすることがまだ難しいのだろう。あまりピンと来ない表情をしている子どもたちがほとんどであった。

最初、教師は種から発芽できた方が子どもたちにとっては感動が大きいものになるので、発芽しやすい方法を知らせて試してみる方がよいのではないかと考えていた。しかし、それはこの時期の子どもたちにとってはふさわしいとは限らず、むしろ自分たちが思いついたものを植えてみるというそのものに面白さを感じている様子だったので、その気持ちをしっかりと支えることにした。

【考察】

子どもたちが“いろいろな種を植えてみたい”と自分なりにイメージしたことを自信をもって実現するためには、教師は子どもたちがどのようなことに心動かされているのかを見取り、そこにしっかりと寄り添いながら、教師の願いを織り交ぜていくことを考えてかかわっていくことが大切であることがわかった。

子どもたちの“いろいろな種を植えてみたい”という意欲や態度を育むためには、“やってみよう”と思ったその時にすぐ実現できるような環境構成を行うことが大切であることがわかった。

実践例2「イチゴを育てたよ」（5月～6月）

「イチゴが赤くなってきているよ」

子どもたちにふれてほしいと願い、植木鉢に植えたイチゴの苗を保育室前の子どもたちが見えやすい場所に置く。

・「お花が咲いてるよ」「可愛いねえ」と可愛い

花の様子に気づいている姿。

- ・そのうちに、緑のイチゴが出てきているのを見つけて、「イチゴはね、緑から赤になるんよ」「緑のイチゴはね、イチゴの赤ちゃんなんよ」「イチゴは赤くなったら食べられるんよ」などそばにいる友だちや教師に伝えている姿。
 - ・イチゴが緑から赤にかわる様子を見ながら「ほら、ここが赤くなってきているよ」とそうっとさわってみたり、「早く食べたいなあ」「大きくなあれ」と言いながら水やりをしている姿。
 - ・偶然、図鑑で見つけたイチゴの生長のプロセスが描かれている絵を見て「ほら、イチゴがあった！こうやってイチゴって大きくなるんよ」と瞳を輝かせて言っている姿。
- など、そばを通るたびにイチゴの様子を見ながら愛着を感じている姿が見られる。



図2 イチゴが赤くなってきているよ

「1個のイチゴをみんなで分けて食べたよ」

やっとイチゴがおいしそうに赤く色づき、食べ頃になる。ちょうど教育実習中だったので、実習生がこの1個のイチゴを何とかみんなで食べる経験ができるようにしたいと願い、クラス全員に声をかける。

「赤いイチゴは1個できたね。でも、1個しかないけどどうしたらいいと思う？」と尋ねると、子どもたちから様々な声が出てくる。「食べたあい」「101個も食べたい!」「23(園児数)にわったらいい」「1回噛んで戻してまた口に入れる」「けんかになるよお」「ちっちゃく切る」「他の

イチゴが赤くなるのを待つ」「ハサミムシにあげればいい」「ムカデとかにもあげたらいい」「テントウムシさんにもあげたらいい」「半分こしたら」「100個切ってみんなで分ける」というように、様々な声が出てくるが結局1個のイチゴをみんなに分けて食べることになる。

1個のイチゴを慎重にそして神妙に人数分切り分けている実習生のそばに子どもたちは集まり、じいっと固唾を飲むようにしながら見つめている。そして米粒程度のイチゴをみんなでいただく。「赤ちゃんより小さくなって」「ネズミより小さくなっている」と言いながらも、みんなとても大事そうにいただく。そして「しょっぱい」「まずかった」「うまい」「おいしい」など味に関して様々な声が出ていたが、誰一人として「ええっ、これだけしかないのお？」と不満の声をあげる姿は見られなかった。温室栽培のイチゴではないので、必ずしも甘いだけではないことを子どもたちは感じていたようだが、「まずい」「しょっぱい」と言っている子どもも、だからといって食べないという姿がなかった。



図3 1個のいちごをみんなに分けたよ

【考察】

自分の思いをあらわすことが楽しくてたまらない子どもたちはてんでに言っているように見えたが、誰かが「ハサミムシにあげたらいい」という声を出すと「ムカデとかにもあげたらいい」というように虫に関することが出始める様子も見られ

た。みんなの思いを聞く場面を設けることで、子どもたちは友だちの言葉もよく聞き、多様なイメージにふれ、そのことをきっかけに自分のイメージを広げていることがわかった。

たった1個のイチゴをみんなに分け合っていたくという体験は子どもたちにとってとても新鮮だったようで、そのことを通してわずかなイチゴを実に大切に“味わう”姿が見られた。子どもたちが身近にふれる中で収穫した1個のイチゴをクラス全員で分け合っていたくという体験はまさに感覚を鋭く働かせるのに有効であったととらえる。

上記2点のように感覚を鋭く感じて感動したり、友だちの多様なイメージにふれることを楽しむためには、その対象が子どもたちにとって身近で愛着を感じることができそうな環境構成や教師のかかわりが必要であると考えられる。

実践例3 「キュウリを育てたよ」

(7月～10月)

「キュウリを食べたよ」

保育室前には教師が植えた野菜(キュウリ・ナス・ピーマン)などがあり、野菜を収穫してはみんなで食べるという経験を重ねてきた。

大きなキュウリができあがった時のこと。「どうして幼稚園のキュウリはチクチクするんかねえ」「でかいよお!」「みんな、見てください。こんなに大きなキュウリがとれました」とい言ながら収穫する。1本のキュウリを塩もみしたものをみんなでいただく。子どもたちはやはりみんなですしずつ分け合っていたくということが、何だかとてもウキウキする気分になるのか、よく味わっている姿を多く見受ける。「真ん中がやわらかくて皮がかたい」「にがい」「あまずっぱい」「おいしい」「やわらかかたい」「こりこりする」「つるつる」というように、様々な声が聞こえてくる。教師は一人ひとりの声をじっくりと聞くことを心がける。

実践例1にあったように、子どもたちが身近な

ものを“種”としてとらえて、これを植えたら芽が出るかもしれないとイメージを膨らませることそのものはとても楽しいことだととらえながらも、植えても芽が出ないのであれば、子どもたちにとっても興味はそれで終わってしまいがちな現状にある。もっと発芽しやすい種の生長する様子を見たら子どもたちはより感動するのではないかと考えていた。ちょうどその頃、保育室前で栽培していた1本のキュウリを食した後、さらに1本のキュウリが実をつけ、熟れて黄色くなり始める。しっかり黄色く熟れる頃には中に種ができあがり、それをみんなで植えることができたなら、先に述べたように生長の様子に感動することができるのではないかと考え、しっかり黄色くなるまであえてそのままにしておく。

「キュウリの種を植えよう」

しっかりキュウリが黄色くなったある日のこと。教師は「あれっ、この黄色いのは何だろうね？」と子どもたちに投げかけてみる。すると、「黄色い種から黄色いきゅうりができたんよ。緑のキュウリは緑の種からできたんよ」「だいぶたったけえよ」「夏になったけえよ」「できたばかりじゃけえよ」「鳥にかじられたんじゃない？」「バナナみたい」「キュウリがちくちくとげとげしてたよ」「土の中で埋めてたからよ」「トマトもちくちくしてた」「からすに食べられたんよ」「さわったらいたかったよ」とやはり様々な声が出てくる。この時期は一つの正解を求めるといよりは、自分なりの思いやイメージをもつことが大切だと考え、一人ひとりの言葉を「そうかもしれないね」と受け止めることにする。

そして、「このキュウリをどうする？」と尋ねると、やはり「みんなで食べる！」ということになり、みんなの前でキュウリを包丁で割る。すると、中に種がいっぱいつまっている。子どもたちは「あっ、種がある！植えてみよう！」という声が多く上がる。次の日に一人一粒ずつ

種を植えようということになる。

子どもたちなりにイメージを広げてほしいと願い、一人ひとり種を蒔きながら「種を植えたらどうなるかなあ？」と声をかけていると「キュウリ」「こおんに大きくなる」（と両手で示している）「先生より大きくなったらどうする？」「1番大きくなる」「どんどん大きくなる」「芽が出て大きすぎるようになる」「キュウリがでたらお母さんに持って行ってあげたい」「芽が出ると思う」と様々な声が出る。

最初からキュウリが出るということはわかっているのですが、イメージを膨らませるといよりは、キュウリの芽が出ることを前提にした言葉がやはり多い。また、大きくなることを期待しているのか、言葉だけでなく体全体を通してあらかず姿が見られたので、「うわあ、そんなに大きくなったらいいねえ」と子どもの期待感に添えるようにかかわる。



図4 キュウリの種をみんなでとったよ

「キュウリの芽がでたよ」

教師もキュウリを種から育てた経験は初めてであったが、植えて数日してすぐに発芽し始めたことに、子どもたちも教師も素直に感動する。「ちょっと芽が出てる！」「ぼくのキュウリが大きくなってる！」「芽がぎゅってこんなになってるよ」「みんなで食べられたらいいねえ」「ふにやあっとしてるよ」「キュウリの葉っぱが出たよ。目みたいな形になってる」（双葉を見て）「中くらいまで大きくなったね。もみじの木みたい」

「あっ、芽が出てる！こんなに大きくなって
るよ。（と発芽の様子を手で示す）でっかくなっ
たらおうちに持って帰ってみんなで食べたいな」
「あっ、また大きくなって。きのうはこんな
だったのに（と手で丈を示す）」



図5 キュウリが大きくなってよ

「葉っぱができたよ」

「大きくなって。でかい！（葉っぱは）5枚あ
るよ。前は4枚とか3枚だった。次は6枚になる
かなあ」「ギザギザハートが1枚。ツルツルハ
ートが2枚ある」「うわっ、すごい大きくなっ
てる。ハートの形。（葉っぱは）5個あるよ」「ぞ
うさんの鼻みたいな形してる」「キュウリが大
きくなってる。きつと土の下にキュウリができて
るかもよ。だってじゃがいもも土の下にできて
たよ」「これさくつとする。これ固い。3枚だ
ったのが4枚になってる」「これ、チクツつてな
ってる。丸い方はチクツつてないよ」「（葉
っぱを）さわったらなんか気持ち悪い。くすぐ
たくつてかゆくなりそう」「ジザジザしてる。さ
わったら線がすっきりしてる」

キュウリが生長するにつれて葉っぱが増えたこ
とに感動している姿、葉っぱの形からイメージし
ている姿、葉っぱを実際にさわってみる姿が見
られた。子どもたちの感動に共感するとともに、
キュウリの生長により感動しながらかわれるこ
とができるように、「葉っぱは何枚ある？」「葉
っぱはどんな形？」「葉っぱをさわったらど
んな感じ？」というように、子どもが感動し
ていることに即した言葉かけを行うことにす
る。

また、子どもたちがそれぞれに見ている時に共
感したり、全員が揃っている時に例えば「さわ
つてみた時にジザジザする人もいるし、ザラザ
ラしている人もいるんだね。面白いねえ」と人
それぞれに感じ方が違う面白さをしっかり認
めることができるようにする。

「ツルが伸びて花が咲いてキュウリができたよ」

そのうちに、ツルが伸び始め、花も咲き始
める。自分なりに感じたことをそばにいる教
師に伝える姿もあるかと思えば、友だちの
キュウリも見てみたり、一緒に見比べたり
する姿も見られる。

＜ツルの力に驚きを感じる＞

ツルを見ながら「これは何だろうねえ」とつ
ぶやいていると、そばにいた友だちが「これ
はね、ツルなんよ。大きくなるとツルが出て
くるんよ」と教えている姿。（ツルを見て）
「カメレオンのベロみたい」とイメージして
いる姿。「ツルが（友だちのものに）くっ
ついちゃった。きゅうりがかわいそうじゃ
」と感じている姿。「なかなかほどけんね
」と言いながら教師と一緒にツルをほどく
姿。ツルがそばにあるモミジの木にまでか
らみついているのを見て「ツルがモミジま
で絡みついているよ！うわあ、すごい」とつ
ぶやいている姿。「（隣に植えた）〇〇
ちゃんのツルが巻き合ってきたよ」「あり
ゃあ！こうなってる。（ツルが）グルグル
になってる」とツルの力にびっくりして
いる姿。

＜花やキュウリの生長に感動したり、友だちと感動を共有したりする＞

「花が咲いてるよ」「私のは3個あるよ。〇
〇ちゃんのは2個あるね」と友だちの花と
比較している姿。「私のは14までお花が
咲いてるよ！」という友だちの声を聞いて
自分も数え出し、「私のは8個ある」と言
っている姿。「花ができて実ができてる
んだよ。（キュウリが）オーみたいな形が
できてる。小さかったのが中くらいにな
ってる」「花のおしりにくっついているの
を見てちょうだい。キュウリの赤ちゃんが
できてるよ！」と

生長に伴う変化を感じている姿。「A男くんのすごいでっかい！」(B女のものを見て)「見て！見て！(キュウリが)曲がってる！」「B男くんのができてるよ！」など友だちのキュウリも見て感動している姿。(キュウリを)さわりながら「チクチクがある。でもそうっとさわったらいたくないよ」「チクチクおったら汁が出たよ」と実際に触れてみて感じている姿。全員のキュウリがなったわけではないが、そろそろしおれ始める時期になったので、数本をみんなでいただくことにする。「おいしいねえ！」「なんかしょっぱい」と言いながら「またキュウリの種植えたいなあ」と言う声も出る。「みんなが春になって大きい組さんになった頃にまた植えてね」と声をかける。

【考察】

キュウリという素材から、一度収穫して食べたことに対する感動をもとに再び種から育てるといように自分たちにとって身近であること、また発芽から生長する様子が様々な変化を伴うものであったこと、ツルが巻き付く様子など驚きや不思議さを伴うことなどが見られた。このような素材の特性が子どもたちにとってはより感動を伴うものであることや、一人ひとりのものが分かるように植えたという環境があることで、そばにいる教師や友だちと感動を共有することにつながったのではないかととらえる。

キュウリの場合は、イメージを広げるというよりは、実際に生長する過程において様々に変化する様子や様々な感覚を刺激する要素(例えば、葉の形・葉をさわった時の感覚・ツルの力の不思議さなど)があった。したがって、その都度子どものつぶやきを丁寧に受け止めるとともに、子どもたちの感動に即した言葉かけを行うなど、対象の特性に応じたかかわりが必要であることがわかった。

実践例4 魔法の国の妖精から届いた球根

(9月～11月)

キュウリの生長のプロセスにおいて、子どもたちは様々な感覚を通して様々なことを感じ、感動したことを言葉や動作などであらわしている姿が見られた。一方で、キュウリの種を植えているのはわかっているのに、キュウリができることは十分にわかっている。イメージが豊かに広がる4歳児の子どもたちに、自分なりの多様なイメージが楽しめるように、比較的短期に開花するサフランの球根を名前を知らせずに植えることにする。

「妖精さんから球根が届いたよ」

「ジャックと豆の木」の話とキュウリの生長を絡めながら魔法の種という空想の話をして、絵の具で魔法の木を描いてみる活動を取り入れた次の日のこと。保育室の裏に魔法の国の妖精から手紙と球根が届く。手紙には「みんなが魔法の木を描いたのがよく見えて嬉しかったよ。魔法の球根をプレゼントします」と書かれている。子どもたちからは「やったあ！」と大歓声をあげたり、ガッツポーズをしたりする姿が見られる。「妖精さんにありがとうって言わなくちゃ！」ということになり、保育室から裏山に向けて「妖精さ～ん、ありがとう！！」と叫ぶ。

「何が咲くかなあ？」

次の日に、一人ずつ球根を植える。今度は何の球根かが分からないので、子どもたちのイメージが広がるように「どんなものが咲くんだろうね？」と声をかけると、様々な答えが返ってくる。「鬼より大きいかも。魔法の球根から芽が出たらいいな」「虹色の花が咲くかもねってママが言ってたよ」「こんなに大きくなる(と自分の背より高く手を伸ばして示す)」「花が咲いてきれい。それがキュウリみたいになる」「ピンクの花が咲く」「ぼくめっちゃ長い木になると思う。大きくなあれ」「なんかナスみたいなフニャフニャって出る」「虹色の花と虹色の豆」「チューリップ」「きれいなお花が咲い

たらいいな。お母さんにプレゼントしたい」

「どうして芽が出ないの？」

しかし、実際にはすぐに出ないので、子どもたちなりに不思議に思う姿も見られる。「どうして芽が出てこんのだろう。きっと芽が土の中でう〜んとなってるんかねえ」「どうしてジャックと豆の木は次の日に出たのに、魔法の種は出てこんのじゃろう？」「早く出ないのは土の中でうっうっとなりよるんじゃない？（と両手でこぶしを作りながら）

「やっと芽が出たよ」

「小さい角みみたいな芽が2個出てるんよ」「2つ芽が出たんよ！水をどんどん飲みよるけえよ」「たけのこのような芽が出てる」「とんがってる芽が出てるし、さわってみたらかたい」「ツノみたいにツンツンしてる」「赤ちゃんかなあ」「小さいギザギザのが出てる」「芽からちよつとやわらかい緑が出たよ」「おっきくなってる。ねぎまが出てる」「何か歯みたいにできてる」「（さわったら）いたい」「ちくちくするね」「ギザギザの葉っぱだ」「糞虫みたいになってきた」「葉っぱが前は出ていなかったのが今は出てきたよ」など教師や友だちに自分が感じたことを伝えている。今度は細い葉っぱが出ている様子を見てイメージしたり実際に触れてみて感じたりしている。

「つぼみが出て、花が咲いたよ」

「（友だちのもの全てを見ながら）こことここここが咲いてるよ！」「つぼみができてる！やったあ！」「1個だけ咲いてる（後は）まだつぼみよ」「（花が）開いているのと閉じているのがあるよ」「紫色の花がついているよ。きれいだねえ」「私のはまだ葉っぱが出てるだけ。つぼみが出たらいいなあ」「私の花が咲いてる！おじぎしてこんなになってるよ（と体で花の様子を表す）」「ふくらんでた」「（前は）咲いてなかったのに咲いてるよ」「妖精さんに『花が咲いたよ』ってお手紙書いたらいいね」



図6 妖精さんがくれた球根から花が咲いたよ

サフランはキュウリほどには様々な感覚を刺激するわけではないが、生長する期待感もてるように、またイメージを広げることができるようにすることで、様々なイメージをもつことを楽しみながらかわろうとする姿が見られた。今回は子どもの興味が持続しやすいように、比較的短期に生長できるサフランの球根を植えたのだが、最初子どもたちは“どんなにきれいな色で”“どんなに大きい花が”というようなイメージや期待感もっていた。したがって、できれば子どもたちが興味をもっている色や大きさなどの観点で感動を伴うようなものを用意するとよかったのかもしれない。

「どうして違う所に咲いてるの？」

ちょうどこの頃、偶然ではあったが子どもたちは園庭にも同じ花が咲いていることを発見する。どうして自分たちが植えていない所に咲いているのかが不思議でならないようで、自分たちなりにイメージしている姿が見られる。

「先生、大変！来てえっ！」「イチヨウの木の下にも魔法の球根があったよ。妖精さんが黙って植えたんかねえ」「え〜っ！？植えてない所に花が咲いてる。不思議！先生が植えたん？妖精さんが植えたんかねえ」「植えてないのに魔法の球根がお庭に咲いてるよ！魔法がかかったんじゃ！」「幼稚園のために、みんなが見れるように妖精さんが持ってきたんかねえ。

（目をつむり手を合わせながら）ありがとう」「これは（自分たちのものとは）違うんじゃないの。だって妖精さんが落とすわけないよ。え

らいし、頭いいじゃん。人には見えないし、魔法かけるし、（植えていたら）お友だちわかるじゃん」など、園庭で遊んでいる最中に木の家の固定遊具のそばや遊戯室のそばなどに花が咲いているのを見つけては教師や友だちと話している。子どもなりのイメージを広げることが大切にしたいと願い、教師は「どうしてかねえ？」と一緒に不思議さにひたることにする。

【考察】

身近な自然に対して感動したりイメージを広げたり、あらわす喜びを感じたりするためには、子どもが興味をもっているようなことに即した教材の更なる吟味が必要である。

園庭にも自分たちがもらった魔法の球根と同じものが他に咲いていることにここまで感動したり不思議さを感じることは偶然であった。偶然ではあったが、偶然の出来事に心動かされるような土台となる体験が生きたのではないかととらえる。子どもたちは不思議さを感じた時に、より強く心を揺り動かされてイメージを広げていこうとする姿が見られ、不思議さを感じるためにはその土台となるような感動体験が必要であることがわかった。

実践例5（実践例1のその後）

身近な種を植えてみよう（9月～11月）

クラス全員でキュウリやサフランを育てている一方で（実践例3・4）、子どもたちは園庭や家庭で見つけたものを“種”ととらえて、自分なりにかかわる姿が続けて見られる。

・7月下旬に家でスイカを食べながら「そうだ！スイカの種を幼稚園で植えよう」と持って来る。植えたものが9月には花を咲かせる。「スイカの花が咲いたよ！スイカができたらどうする？みんなで食べよう。そしてまたスイカの種を植えよう」と夢見るような瞳を輝かせながらイメージを広げている。（結局種を植えること自体が遅いので実が生るまでにはい

たらなかった）

- ・「ゴーヤの種、見つけたよ。ギザギザして茶色い種よ。春になってから植えるけえ。おばあちゃんに教えてもらったよ」と言っている姿。
- ・個人用植木鉢に植えたフウセンカズラから種をとり、それをまた植える姿が見られる。発芽した様子を見て「こんなになってる」と手を曲げて葉っぱが曲がるように発芽している様子を表す。「先っちょがちょっとギザギザしてるよ」
- ・「ドングリ拾ってきたよ。みんなで植えたらいいかなあと思ってたくさん拾ったよ。これだけあったらみんなで植えられるんじゃない？」と言いながらドングリをたくさん持ってくる姿。後にみんなで1個ずつ植えることにする。その後もドングリを拾ったり友だちが持ってきたドングリに触れながら「ドングリって木から落ちてくる球根なんよ」「ドングリ植えたらドングリの木ができるよ」とつぶやく姿も見られる。
- ・園庭にあるオシロイバナの種を採る。そして「1個植えよう。1個は色水に使おう」と言っている。結局色水遊びを始めるとそれが楽しくて全部種は色水に使っていた。
- ・園庭で見つけたエノコログサをさわりながら「ネコジャラシ（エノコログサの通称）の中から種を見つけたよ。白い種があったよ。またネコジャラシできるかなあ？」とつぶやきながら植える。
- ・園庭にあったヨウシュヤマゴボウの実を使って色水遊びをしている際に、小さい種がたくさん出てきているのを見つける。そこで、今度は種だけを根気よく集めて「これは種なんだけど、みんなの分あるかなあ？またいっぱい植えてみよう」とつぶやいている。そしてそばにいる友だちに種を分けている。
- ・C男が家からカキの種を持って来る。D男が「一緒に植えよう」と言いながらカキの種を

持ち歩いているうちになくしてしまう。C男の悲しそうな表情を見て、何とかしなくてはと思ったD男は園庭にあるオシロイバナの種を見つけてきて「これを一緒に植えよう」と植えている。

- ・「これはね、レモンの種なんよ。きのうサンマを食べる時にあったんよ」と言いながら持って来て植える。「レモンがいっぱいできたらお兄ちゃんにあげる」とつぶやいている。

【考察】

種を集めては、植えるもの・遊ぶものに分けて使おうという発想が少しずつ出てきている。これは、身近な自然物（種）が単なる遊びの材料であることだけにとどまらず、“いのち”そのものであることを体感しているととらえている。このように身近な自然物のもつ意味合いや特徴を幅広くとらえることができるようになると、感じ、イメージし、あらかずその営みも豊かになっていくことがわかった。したがって、子どもたちの体験が広がるきっかけがあった時に、それを見逃さずに支える教師のかかわりが必要であることがわかった。

4. 実践を終えて

今回は種をきっかけにしながら、実践を積み重ねる中で、次のようなことがわかってきた。

- ・感じ、イメージし、あらかず喜びを育むためには対象となるものに親しみや愛着の気もちがもてるということが土台として必要である。
- ・子どもたちは対象となるものに関して驚きや不思議さを感じた時に、より鋭く感じたりイメージしたりすることができる。したがって、偶発的にあるいは意図的に驚いたり不思議さを感じたりするような場を生かすことが大切である。
- ・一つの体験がまた別の体験につながっていくようなきっかけを、子どもたちが何気なく見出している時、あるいは子どもたちが明らかに求めている時がある。そのようなタイミングを見逃

さずに支えることが必要である。

- ・テーマに掲げた“あらかず”という意味を当初は感じたりイメージしたりして心揺さぶられたその時に、その喜びの心もちを“あらかず”というふうにとらえていた。しかし、子どもたちは心揺さぶられたその時にとどまらず、それを原動力として、また違う場所で違うものや事象に対して主体的に感じたりイメージしたりしながらかわっていきこうとする姿が見られ、これこそ非常に貴重な“あらかず”としてとらえる必要性を感じた。つまり、このように生活の中で感じ、イメージし、あらかずその営みの先に“主体的に生活を創り出す”ことができるようになるからこそ、感じ、イメージし、あらかず“喜び”を育むことが大切だということも改めて感じた。

5. おわりに

この実践は、事例1の最初に述べたように昨年の年中児が植えた柿の種の芽が発端となっている。その昨年の年中児であるが、年長児になった夏頃にふっと昨年植えた種の様子を見に来て「今頃、芽が出るんじゃあ」とつぶやいている。その一言は非常に貴重なものであったとその時強く驚かされたのである。それだけ、1年前に種を植えたというその体験が心の中で生きていたものであったのであろう。私たち教師は、子どもたちが豊かに感じ、イメージし、あらかずことができるようにと願っている。しかし、その“豊かさ”は決して大人から見て目立つものや派手なものに限らず、このように一見目立たないものや地味なものにもあらわれているということを読み取らなければならないと思う。

現在の年中児がささやかな経験をつないでいながら、昨年の年中児のように、年長児になった時にも自然に対する感動や不思議さを素直に体感しながら主体的に生活を創ってほしいと願っている。